

「狗邪韓国」は無かった----卑弥呼の都する所とは

令和4年3月7日

水野 健一

はじめに

邪馬台国の謎について、ここ最近自分の中で結論の出たことがあります。それは魏志倭人伝からではその場所の特定は不可能だということです。そしてそこから進む道は二つ。その他の資料も利用して場所を特定するか、魏志倭人伝だけで分かることを確定させるか。今回は後者の論述です。

1 「狗邪韓国」はなかった

日本人である私は一般的な書籍から邪馬台国の謎解きに触れ、魏志倭人伝の原文を自分で読んでみようと思い立ち、ウェブ上で調べてみました。

高校の時に漢文を習った程度の実力では漢字のみの原文は意味を取ることはできず、必然的にどなたかの書き下し文、訳文のお世話になることとなります。

そうして解読を自分なりに進め、とりあえず一つの結論に達しました。

その内容は稚拙なものでここに記すのも憚られますが、その時の試行錯誤が今の理論の土台となっていることは間違いありません。

そして新たな資料 張明澄氏の『「誤読だらけの邪馬台国」中国人が記紀と倭人伝を読めば・・・』に出会いました。

張氏の出した結論はあまり賛同できるものではなかったのですが、原文を正確に読むその技法は日本人の書いたどの書籍からも得られないものでした。

張氏は言います。「日本人は自分が何も知らないことすら知らない」

ここから張氏の著作から得たインスピレーションをもとに魏志倭人伝の導入部の解読を進めていきたいと思います。

倭人在帶方東南

大海之中依山島

為國邑舊百餘國

漢時有朝見者今

使譯所通三十國

まずここまで内容に入る前に七文字で区切ってみました。

形としては七言の詩もしくはお経の一部のようになっています。

これは中国語で読んだときにリズムよく聞こえる形で日本人があれこれ書き下し文で訳していたのではわからない点です。

日本人は魏志倭人伝は中国語で書かれているという点を疎かにしてあまりにも自分の都合で読み下してはいないでしょうか。

次に内容の精査に入りますが二行目の

依山島 は、

定説では日本列島もしくは九州島を表していると認識されていたような気がします。

ただ私は依の漢字から山島は対馬や壱岐をイメージしていると考えています。

倭人は普段舟に乗っていて海の中を縦横無尽に駆け巡り、休む時は海流に流されないように山島に立ち寄っているという感じです。

この後にある対海国の描写はこの山島そのままではないでしょうか。

次に進みます。

從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘里始度一海千餘里至對海国

この部分ですが張氏は文法的に七千餘里というのは狗邪韓國には付かず次の始度を説明していると言います。

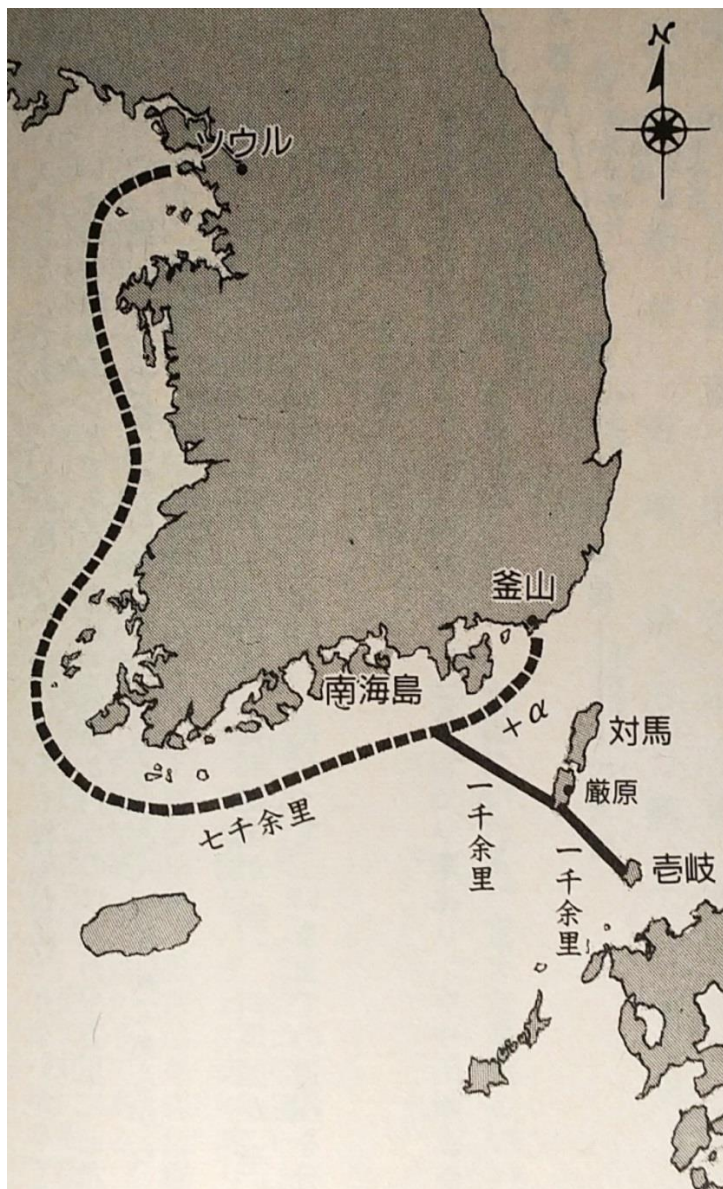
また”到”と”至”は明確に使い分けられている、”到”でたどり着いた狗邪韓國は一つの終点で

あってその先に旅程は続かないとも言います。

このことから帯方郡使梯儁の一行は狗邪韓国には行かずその途中で海を渡り始めたはずだ
そうです。

図で説明すると使節は郡を出て韓国沿いを舟で水行し釜山まで行かない七千餘里
の所で対馬に渡り始めたということです。

図1



こう読み解くと狗邪韓国に関する二つの疑問点が解消できます。

一つは狗邪韓国は倭の北岸であるにも関わらず官の名称やその国の描写が記されていない
ことです。先の「韓伝」では韓国は南は倭と陸地で接しているような記述があるので狗邪韓
国は倭人が住んでいると考えてよいと思われます。それなのに後の対海国以降と違って名

前しか無いのは不自然でした。立ち寄っていない国は名前だけしか書かれていない。このことは郡使の誠実さを逆に表していると考えられます。

もう一つは釜山付近から対馬までは人力の舟では海流の影響で直接渡るのが困難なことです。この問題は、角川書店の古代船野性号での実験で証明されています。帯方郡から対馬に行くなら海流を利用して上流側から海を渡るのが合理的だと思われます。

ここまで理解してふと七千餘里を後ろの文につなげるなら韓国も始度に付けたほうがすっきりするのではないかと思いつきました。

從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪

韓國七千餘里始度一海千餘里至對海国

意味は変わりません、むしろ韓国沿いを七千餘里という説明にもなってちょうど良さそうです。

倭の北岸にあったのは「狗邪韓國」ではなくて「狗邪」だったのです。

実は前々から倭人が住んでいるはずの狗邪韓國はなぜ韓国と付いているのか腑に落ちないものがありました。この国だけ漢字が四文字もあり他の国との違いがずっと疑問でした。それがすっきり解決したのです。

このことは自分にとって発見でした。

常識とされていることは実は先人の解釈を盲信しているだけだということ。

2 卑弥呼の都するところ

ここから日本人が一番興味のあるところに入っていきます。

まずはよく言われているように伊都国までの記述方法と奴国以降ではその順序が違います。

方角 距離 国名

と

方角 国名 距離

です。

張氏によると後者のほうは中国語では仮定の意味を表すのだと言います。

つまり伊都国までは実際に見聞した記述でそれ以降は伝聞の可能性があるということです。ここまではよくある話ですが自分はここから魏志倭人伝を陳寿が撰述したところまで立ち

返って考えてみました。

陳寿は目の前に数多ある資料から必要な部分だけを抜き出して倭人条を作成したはずで。具体的には、魚豢の『魏略』、王沈の『魏書』、正始元年(240)年の梯儁の復命書、正始八(247)年の張政の復命書、魏王朝の残した倭国との公的な外交に関する記録等。重複している部分は削除し必要だと思われるところは活かしてどこかに挿入して倭人条を作成していきました。このことからの推理ですが、倭人条の旅程部分『方角 国名 距離』の奴国以降の部分は、印綬が目的の梯儁の一行の報告書に張政が後に伊都国で収集した情報が挿入されたと考えることができます。陳寿はこれらの情報を必要だと考えたため倭人条に盛り込もうと試みました。しかし両方の復命書を前後に並べて利用すると重複部分もあり冗長になってしまいます。それ故最小限の加筆で済ますためには梯儁の報告書の伊都国までの旅程の次に差し込むしかなかったのです。このことを証明する術はありません。ただ自分が同じ状況におかれた時もっとも良い方法を試行錯誤した場合現在伝わっている倭人条の形状に結果的に近づいていくということです。

ではその挿入されたと思われる部分を削除した原文を次に記します。それは梯儁の報告書の本来の形を復元するということでもあります。

東南陸行五百里到伊都國 官日爾支 副日泄謨觚柄渠觚

有千餘戸 出有王 皆統屬女王國 郡使往来常所駐

自女王國以北 其戸數道里可得略載 其餘旁國遠絶 不可得詳

次有斯馬國 次有巴百支國 次有伊邪國 次有都支國 次有彌奴國 次有好古都國

次有不呼國 次有姐奴國 次有對蘇國 次有蘇奴國 次有呼邑國 次有華奴蘇奴國

次有鬼國 次有為吾國 次有鬼奴國 次有邪馬國 次有躬臣國 次有巴利國

次有支惟國 次有烏奴國 次有奴國 此女王境界所盡

其南有狗奴國 男子為王 其官有狗古智卑狗 不屬女王 自郡至女王國 萬二千餘里

張政の追加調査部分が無くなるだけで文章の流れが非常に良くなります。
まずは”到”が伊都国に使われているのでここが最終目的地です。
ここで梯儁の一行は女王に親魏倭王の印を授けました。
目的を果たした使節は情報収集に入ります。この先はどうなっているのかと。
女王の影響下にある国の名前を聞き、奴国までが範囲だと知ります。都なので情報収集のための材料が豊富だったのでしょうか。
そしてその先の敵対している国の情報、
最後に女王の影響下つまり奴国までのおおよその距離。
報告書としては適切な構造なのではないでしょうか。

これで今まで魏志倭人伝であれこれ議論されていた問題がいくつか解決しました。

- ・ 奴国が二か所出てくるがその疑問点
- ・ 使節は伊都国で止まったかその先に行ったのか
- ・ 万二千里と水行十日陸行一月の矛盾

また我々は伊都国の漢字についてあまりにも音ばかり気を取られていなかったでしょうか。
選んだのは中国人なので必ず意味も込められていると考えるべきです。
“伊”は神様を呼ぶ聖職者の意味があるようです。卑弥呼が思い浮かびます。
“都”はそのまま都です。
このことから目的地は伊都国だったと気付くべきでした。

ここで一度立ち止まってみましょう。
なぜ我々は女王国と聞いて卑弥呼を思い浮かべるのか。
それは知っているからです。
しかし魏志倭人伝をここまで読んでも”卑弥呼”という単語は出てきていません。
わかることは
女王が都する所は伊都国であるということです。
しかし女王とはいったい誰なのか、
初めて読んだ人はその点をずっと消化不良な気持ちでいるはずで
小説等、人を楽しませる文章ならそれでもいいかもしれませんが、事実を記載する公文書としてはあまりよくないと言えます。
理路整然とした文章なら
「倭人の国には我が中国と違って女性が王の国がある、その女王の名前は卑弥呼という」
というような記述があってはじめて女王国という単語が違和感なく使えると思います。

そういう構造になっていないことがいろいろな報告書をそのまま切り貼りしてあることの証拠なのではないでしょうか。

しかしこれは陳寿が悪いわけではなく当時の中国人は公文書を書くとき、古文献を極力そのまま引用するのが正しいという習慣があったからなのです。

そのことが後の日本人の魏志倭人伝解読に悪影響を与えてしまいました。

結論

「卑弥呼が都を置いている邪馬台国」という我々が今まで謎を解くためのスタート地点にしていた前提は、いくつかの報告書を陳寿が切り貼りした結果、そのつながりのまずさからそう読み取れてしまう国だったと今は思います。卑弥呼は実際に存在し、邪馬台国も存在しましたが、「邪馬台国の卑弥呼」は日本人が魏志倭人伝から作り出した幻の存在だと提起して筆を置きたいとおもいます。

ありがとうございました。

参考文献

古田武彦 『[邪馬台国はなかった](#)—解読された倭人伝の謎—』 [朝日新聞社](#) 1971年

張明澄 『誤読だらけの邪馬台国：中国人が記紀と倭人伝を読めば...』 久保書店

1992年

上野武 女王卑弥呼の「都する所」資料批判で解けた倭人伝の謎 NHK出版 2004

年